

楕円単数と2変数p進L関数

九大理 小塚和人 (Kazuhito Kozuka)

§1. 序

p を奇素数とし、各整数 $n \geq 0$ に対し、 $\zeta_{p^{n+1}}$ を1の原始 p^{n+1} 乗根とする。 \mathbb{Q}_p をp進有理数体、 U_n を $\mathbb{Q}_p(\zeta_{p^{n+1}})$ の主単数群とする。 C_n を $\mathbb{Q}(\zeta_{p^{n+1}})$ の円単数で、 U_n に属するものの全体のなす群とし、 C_n の U_n における閉包を \bar{C}_n と書き、 $Y_n = \varprojlim_{(Norm)} U_n / \bar{C}_n$ とおく。ここに逆極限は、ノルムに関するものである。このとき、 Y_n は自然に岩沢代数 $\mathbb{Z}_p[[T]]$ 上の加群になり、 $\text{Gal}(\mathbb{Q}_p(\zeta_p)/\mathbb{Q}_p)$ の自明でない各偶指標 k に対し、 Y_n の k -因有空間の characteristic power series は、p進L関数の補間級数と $\mathbb{Z}_p[[T]]$ において同伴になる。これは Coleman power series を用いると、次の方針で証明される。

$\zeta_{p^{n+1}}$ ($n=0, 1, 2, \dots$) を、 $\zeta_{p^{n+1}}^p = \zeta_{p^n}$ となるようにとる。このとき、 p と素な $a \in \mathbb{Z}$ に対し、 $(\zeta_{p^{n+1}}^a - 1 / \zeta_{p^{n+1}} - 1)_{n=0}^\infty \in \varprojlim_{(Norm)} U_{\mathbb{Q}_p(\zeta_{p^{n+1}})}^\times$ となる。ここに、 $U_{\mathbb{Q}_p(\zeta_{p^{n+1}})}^\times$ は、 $\mathbb{Q}_p(\zeta_{p^{n+1}})$ の単数群である。 $C_a(T) = (1+T)^a - 1 / T$ とおくと、 $\zeta_{p^{n+1}}^a - 1 / \zeta_{p^{n+1}} - 1 = C_a(\zeta_{p^{n+1}} - 1)$ ($\forall n \geq 0$)。即ち、 $C_a(T)$ は、乘

法的形式群 G_m の Tate-module $\varprojlim(G_m)_{p^{n+1}}$ の生成元 $(\zeta_{p^{n+1}} - 1)_{n=0}^\infty$ に関する $(\zeta_{p^{n+1}}^a - 1 / \zeta_{p^{n+1}} - 1)_{n=0}^\infty$ の Coleman power series である。このとき, parameter $Z = \log(1 + T)$ による対数微分 $d/dZ \log C_a(T)$ の係数に, Bernoulli 数が現われる。従って, 中級数 $d/dZ \log C_a(T)$ と, $Gall(0, b_p)$ (0_p) の自明でない各偶指標 k に付随した P -変換の補間級数か s , Cyclotomic な P 進 L -関数の補間級数が容易に構成され, さらに \mathbb{Y}_0 の k -固有空間の characteristic power series がこの補間級数であることも導かれる。

上記の内容の elliptic な場合での analogy は, 1 变数の場合については Coates-Wiles [1], Goldstein [3] 等で, 2 变数の場合の結果は, Yager [7] で述べられている。

ここでは, Yager [7] における 楕円单数の定義を若干修正して, 改良された結果を述べる。主結果は, §6, §7 で紹介するが, これは, Goldstein [3] の定理 3.10.1) と定理 3.11.1) の 2 变数の場合における analogy に相当する。

§2. 記法

K を複素数体 \mathbb{C} に含まれる 類数 1 の虚 2 次体, $-d_K$ を, K の判別式, \mathcal{O} を K の整数環とする。 E を K 上 定義された 楕円曲線で, \mathcal{O} による 虚数乗法を持つものとし, γ_E を E の K 上の量指標, χ を γ_E の 尊手とする。 E の Weierstrass model

$$(2.1) \quad y^2 = 4x^3 - g_2x - g_3$$

を, $g_2, g_3 \in \mathcal{H}$ で, (2.1) の判別式が 67 の素因子のみで割り切れるように固定する. $P(z)$ を, (2.1) に関する Weierstrass P -関数, L を $P(z)$ の周期格子とし, $L = \omega \mathcal{H}$ なる $\omega \in \mathcal{H}$ を固定する. $\xi(z) = (P(z), P'(z))$ とおく. \mathcal{H} の元 α を, E の自己準同型 $\xi(z) \mapsto \xi(dz)$ ともみなすことにより, \mathcal{H} と $\text{End}(E)$ とを同一視する.

K の素イデアル \mathfrak{P} を, $(\mathfrak{P}, 6d_K N\mathfrak{P}) = (1)$ かつ, \mathfrak{P} の絶対次数が 1 となるようにとり, $P = N\mathfrak{P}$ とおく. (P) は K で完全分解する: $(P) = \mathfrak{P} \mathfrak{P}^*$. $\pi = \psi_E(\mathfrak{P})$, $\pi^* = \psi_E(\mathfrak{P}^*)$ とおく. π, π^* はそれぞれ, $\mathfrak{P}, \mathfrak{P}^*$ の生成元である. 各 $\alpha \in \mathcal{H}$ に対し, $E_\alpha = \ker(E \xrightarrow{\alpha} E)$ と書くことにし, $0 \leq m, n \in \mathbb{Z}$ に対し,

$$F_m = K(E_{\pi^{n+m+1}}), \quad K_n = K(E_{\pi^{n+1}}), \quad K_{n,m} = F_m(E_{\pi^{n+1}}),$$

$$F_\infty = \bigcup_{m \geq 0} F_m, \quad K_\infty = \bigcup_{n, m \geq 0} K_{n,m}.$$

とおく. このとき \mathfrak{P} は, 拡大 F_∞/K で不分岐, $\bigcup_{n \geq 0} K_n/K$ で完全分岐する. さらに, \mathfrak{P} の上にある F_∞ の素イデアルの個数は有限である.

\mathfrak{P} の上にある F_∞ の素イデアル \mathfrak{P}_∞ を 1 つ固定し, $\mathfrak{P}_m = \mathfrak{P}_\infty \cap F_m$ とおく. \mathfrak{P} の上にある F_m の各素イデアル \mathfrak{P} に対し, $\mathfrak{P}_m^{(v)}$ を F_m の v による完備化とし, $\mathfrak{P}_m^{(v)}$ の整数環を, $\mathcal{O}_m^{(v)}$ と書く. v の上にある $K_{n,m}$ の素イデアルは唯一つである. この素イデアルによる $K_{n,m}$ の完備化を, $\mathfrak{P}_{n,m}^{(v)}$ と書く. 特に, $v = \mathfrak{P}_m$ のときは, 添字の v を省略し, 単に $\mathfrak{P}_m, \mathcal{O}_m, \mathfrak{P}_{n,m}$ と書くことにする. K_∞ を K

のよによる完備化, \mathbb{F}_p を K_p の整数環とし, 以下 \mathbb{F}_p を \mathbb{Q}_p の整数環 \mathbb{Z}_p と同一視する.

$\tau_p = (\varphi, \mathbb{F}_p/k) \in \text{Gal}(\mathbb{F}_p/k)$ とおく. $\mathcal{F}_\infty = \bigcup_{m \geq 0} \mathcal{F}_m$ とおくと, τ_p は拡大 \mathbb{F}_p/k_p の Frobenius 同型を導入する. この同型も τ_p と書くことにする.

$G_\infty = \text{Gal}(K_\infty/k)$, $P = \text{Gal}(K_\infty/k_{\infty,0})$, また, $E_{\pi^\infty} = \bigcup_{n \geq 0} E_{\pi^{n+1}}$, $E_{\pi^{*\infty}} = \bigcup_{m \geq 0} E_{\pi^{*m+1}}$ とおく. このとき, G_∞ の E_{π^∞} 及び $E_{\pi^{*\infty}}$ への作用を表わす標準的な指標 $k_1: G_\infty \rightarrow \mathbb{Z}_p^\times$ 及び $k_2: G_\infty \rightarrow \mathbb{Z}_p^\times$ が定義され, $(k_1, k_2): G_\infty \cong \mathbb{Z}_p^\times \times \mathbb{Z}_p^\times$, $P \cong (1 + p\mathbb{Z}_p) \times (1 + p\mathbb{Z}_p)$ となる. さらに, $G_\infty = P \times \Delta$ と分解される. ここに Δ は位数 $p-1$ の巡回群 2 個の直積で, 自然に $\text{Gal}(K_{\infty,0}/k)$ と同一視される. $\chi_1 = k_1|_P$, $\chi_2 = k_2|_P$ とおく. このとき, $\{\chi_1, \chi_2\}$ は $\text{Hom}(\Delta, \mathbb{Z}_p^\times)$ を生成する.

任意の $\mathbb{Z}_p[\Delta]$ -加群 A と, $(i_1, i_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2$ に対し, $A^{(i_1, i_2)}$ を A の $\chi_1^{i_1} \chi_2^{i_2}$ -固有空間とする. A は,

$$(2.2) \quad A = \bigoplus_{(i_1, i_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2} A^{(i_1, i_2)}$$

と分解される.

$\Lambda = \mathbb{Z}_p[[\tau_1, \tau_2]]$ とおく. $1 + p\mathbb{Z}_p$ の位相的生成元 ν を固定し, $\tau_1, \tau_2 \in P$ を, $k_1(\tau_1) = k_2(\tau_2) = U$, $k_1(\tau_2) = k_2(\tau_1) = I$ を満たす P の元とする. このとき, P は \mathbb{Z}_p 上 $\{\tau_1, \tau_2\}$ によって生成される. B を P が連続に作用する compact な \mathbb{Z}_p -加群とすると, B には,

$$(1 + \tau_1)x = \tau_1 x, \quad (1 + \tau_2)x = \tau_2 x \quad (\forall x \in B)$$

により、 \wedge -加群の構造が一意に定められる。

$$\omega_{n,1} = (1 + \tau_1)^{p^n} - 1, \quad \omega_{n,2} = (1 + \tau_2)^{p^n} - 1 \quad \text{とおく。}$$

ガロア群 G_∞ は、環 $\prod_{\mathfrak{m}} K_{n,m}^{(v)}$, $\prod_{\mathfrak{m}} \mathcal{O}_m^{(v)}$ に自然に作用する。 $K_{n,m}$, F_m は、これら の環に diagonal に埋め込まれる。 $\mathcal{O}_m = \prod_{\mathfrak{m}} \mathcal{O}_m^{(v)}$ とおく。

$U_{n,m}^{(v)}$, $U_{n,m}^{(v)}$ をそれぞれ $K_{n,m}^{(v)}$ の 単数群、主 单数群とし、

$$U_{n,m}' = \prod_{\mathfrak{m}} U_{n,m}^{(v)}, \quad U_{n,m} = \prod_{\mathfrak{m}} U_{n,m}^{(v)}$$

$$U'_\infty = \varprojlim U'_{n,m}, \quad U_\infty = \varprojlim U_{n,m}$$

とおく。ここに、逆極限はノルムに関するものである。このとき、群環 $\mathbb{Z}_p[G_\infty]$ は自然に U_∞ に作用し、従って U_∞ は compact な P -加群かつ \wedge -加群になる。

\hat{E} を、 E の 演算を parameter t :

$$(2.3) \quad t = -2x/y = -2P(z)/P'(z) = \varepsilon(z)$$

により、展開して得られる形式群とする。 ε を 加法的形式群 G_a の parameter とみなすと、 $\varepsilon(z)$ は \hat{E} の exponential map となる。 $\lambda: \hat{E} \cong G_a$ を \hat{E} の logarithm とする。

\mathbb{F}_p の代数閉包の完備化を \mathbb{C}_p と書き、 ord_p を、 $\text{ord}_p(p) = 1$ と正規化した \mathbb{C}_p の加法的付値とする。

K の整イデアル \mathfrak{g} に対し、 $\mathfrak{g} \cap \mathbb{Z}$ の正の生成元を k_g と書くことにする。また、 $\text{Cl}(\mathfrak{g})$ を K の \mathfrak{g} を法とする Strahl 類群、 R_g を \mathfrak{g} を法とする K の Strahl 類体とする。 $\text{Gal}(K_{n,m}/K)$ の指標 χ

に対し, f_x を $\ker \chi$ の固定体の K 上の導手とする. f_x が g を割り切るとき, χ は reciprocity map を満たす, $Cl(g)$ の導手を指標を導入する. この指標を χ' と書くことにする. 特に $g = f_x$ のとき, χ' は $Cl(f_x)$ の原始的指標になる. これを, $\widehat{\chi}'$ と書くことにする.

§3. 楕円単数

複素平面内の任意の格子 L に対し,

$$\sigma(z, L) = z \prod_{w \in L} (1 - z/w) \exp((z/w) + \frac{1}{2}(z/w)^2)$$

$$\theta(z, L) = \Delta(L) \exp(-6g_2(L)z^2) \sigma(z, L)^{12}$$

とおく. ここに, $\Delta(L)$ は L の判別式で, $g_2(L) = \lim_{s \rightarrow 0^+} \sum_{\substack{w \in L \\ w \neq 0}} w^{-2} |w|^{-2s}$ である.

K の任意の整イデアル \mathfrak{n} に対し,

$$\Theta(z, \mathfrak{n}) = \theta(z, L)^{N(\mathfrak{n})} / \theta(z, \mathfrak{n}^{-1}L)$$

とおく. $\Theta(z, \mathfrak{n})$ は, 格子 L に関する椭円関数となる.

各 $(l_1, l_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2$ に対し, f と $f_{x_1^{l_1} x_2^{l_2}}$ の最大公約イデアルを $f^{(l_1, l_2)}$ と書き, K のイデアル $L^{(l_1, l_2)}$ を, $f \subseteq L^{(l_1, l_2)} \subseteq f^{(l_1, l_2)}$ となるように固定する. Yager [7] では, $L^{(l_1, l_2)} = f$ の場合が扱われた. ここでは, $L^{(l_1, l_2)} = f^{(l_1, l_2)}$ 及び $L^{(l_1, l_2)} = f$ の場合が後に重要になるが, しばらくこの制限を設げずに議論を進める.

$L^{(l_1, l_2)}$ の生成元 $c^{(l_1, l_2)}$ を固定し, $0 \leq m, n \in \mathbb{Z}$ に対し,

$$F_m^{(l_1, l_2)} = F_m(E_{c^{(l_1, l_2)}}), \quad K_{n,m}^{(l_1, l_2)} = K_{n,m}(E_{c^{(l_1, l_2)}})$$

とおく。虚数乗法論により、

$$R_{\mathbb{C}^{(l_1, l_2)g^{m+1}}} \subseteq F_m^{(l_1, l_2)} \subseteq R_{fg^{m+1}}, \quad R_{\mathbb{C}^{(l_1, l_2)g^{m+1}fg^{m+1}}} \subseteq K_{n,m}^{(l_1, l_2)} \subseteq R_{fg^{m+1}fg^{m+1}}$$

となる。 $\rho_m^{(l_1, l_2)} = \Omega_\infty / C^{(l_1, l_2)} \pi^{m+1}$ とおく。 $B_m^{(l_1, l_2)}$ を、 K の fg^* と素な整イデアルの集合で、 $\{(l, F_m^{(l_1, l_2)}/K); l \in B_m^{(l_1, l_2)}\}$ が重複なく $\text{Gal}(F_m^{(l_1, l_2)}/F_m)$ に一致するものとする。 g を $6P_f$ と素な K の整イデアル全体の集合とする。各 $\alpha \in f$ に対し、

$$\Lambda_m^{(l_1, l_2)}(z, \alpha) = \prod_{l \in B_m^{(l_1, l_2)}} \Theta(z + \gamma_E(l) \rho_m^{(l_1, l_2)}, \alpha)$$

とおく。このとき、 $\Lambda_m^{(l_1, l_2)}(z, \alpha)$ は、 F_m 係数の $P(z)$ と $P'(z)$ の有理関数となり、 $B_m^{(l_1, l_2)}$ のとり方にはよらない。

$\mathcal{S} = \{\mu: f \rightarrow \mathbb{Z} \mid \mu(\alpha) = 0 \text{ for almost all } \alpha \in f, \sum_{\alpha \in f} (N\alpha - 1)\mu(\alpha) = 0\}$ とおき、各 $\mu \in \mathcal{S}$ に対し、

$$\Theta(z; \mu) = \prod_{\alpha \in f} \Theta(z, \alpha)^{\mu(\alpha)}, \quad \Lambda_m^{(l_1, l_2)}(z; \mu) = \prod_{\alpha \in f} \Lambda_m^{(l_1, l_2)}(z, \alpha)^{\mu(\alpha)}$$

とおく。

$z_n = \Omega_\infty / \pi^{n+1}$, $u_n = \varepsilon(z_n)$ とおく。 $\varepsilon_n \in U$ を $\varepsilon_n \pi^* \equiv 1 \pmod{g^{n+1}}$ なるものとする。このとき、 $C_{n,m}^{(l_1, l_2)} = \{\Lambda_m^{(l_1, l_2)}(\varepsilon_n^{m+1} z_n; \mu) \mid \mu \in \mathcal{S}\}$ とおくと、 $C_{n,m}^{(l_1, l_2)}$ は、 $K_{n,m}$ の単数群の G_∞ -部分群となる。

各 $\mu \in \mathcal{S}$ に対し、 $\Lambda_m^{(l_1, l_2)}(z; \mu) \in F_m(P(z), P'(z))$ となるから、各 $r \in \text{Gal}(F_\infty/K)$ に対し、 $\Lambda_m^{(l_1, l_2)}(z; \mu)$ が定義される。

$$\ell_{n,m}^{(l_1, l_2)}(\mu) = \Lambda_m^{(l_1, l_2)} z_g^{n+1} (\varepsilon_n^{m+1} z_n; \mu), \quad \ell^{(l_1, l_2)}(\mu) = (\ell_{n,m}^{(l_1, l_2)}(\mu))_{n,m \geq 0}$$

とおく。このとき、diagonal mapにより $C_{n,m}^{(l_1, l_2)} \subseteq U_{n,m}'$ となる。また、 $\ell^{(l_1, l_2)}(\mu) \in U_\infty'$ となる。

一般に, $\beta = (\beta_{n,m}^{(\omega)})_{n,m \geq 0} \in \mathcal{U}_\infty'$ とすると, 各 $0 \leq m \in \mathbb{Z}$ 及び ω の上にある F_m の各素イデアル \mathfrak{v} に対し, Coleman power series $C_{m,\beta}^{(\omega)}(T) \in \mathcal{O}_m^{(\omega)}[[T]]$ が存在して, $\beta_{n,m}^{(\omega)} = C_{m,\beta}^{(\omega)} \circ \varphi_n^{-1}(u_n)$ ($\forall n \geq 0$) が成り立つ ([2], [7])。 $\mathcal{O}_m[[T]] = \prod_{\mathfrak{v} | p} (\mathcal{O}_{m,\mathfrak{v}}^{(\omega)}[[T]])$ と書く。これは, G_∞ -加群になる。 $C_{m,\beta}^{(\omega)}(T) = (C_{m,\beta}^{(\omega)}(T))_{\mathfrak{v} | p} \in \mathcal{O}_m[[T]]$ とおく。

定理 3.1. 各 $\mu \in \mathcal{S}$ に対し,

$$C_{m,e^{(i_1,i_2)}(\mu)}(T) = \Lambda_m^{(i_1,i_2)}(\pi^{*-1(m+1)}\lambda(T); \mu)$$

である。

§ 4. 2 变数 P-変換

本節では、後で用いられる 2 变数 P-変換の基本的性質を述べる。

\mathcal{O}_p を \mathbb{C}_p の整数環, μ を \mathbb{Z}_p^2 上の \mathcal{O}_p -値 measure とする。このとき, μ に巾数

$$(4.1) \quad f_\mu(T_1, T_2) = \sum_{n,m \geq 0} \left(\int_{\mathbb{Z}_p^2} \binom{x_1}{n} \binom{x_2}{m} d\mu \right) T_1^n T_2^m \in \mathcal{O}_p[[T_1, T_2]]$$

が対応し, 対応 $\mu \mapsto f_\mu$ は, \mathbb{Z}_p^2 上の \mathcal{O}_p -値 measures 全体から, $\mathcal{O}_p[[T_1, T_2]]$ への全单射になる。 $f(T_1, T_2) \in \mathcal{O}_p[[T_1, T_2]]$ に対し, f に対応する measure を μ_f と書くことにする。

$x \in \mathbb{Z}_p^\times$ は, $x = \omega(x) \langle x \rangle$ と一意に分解される。ここに $\omega(x)$ は, 1 の $p-1$ 乗根, $\langle x \rangle \equiv 1 \pmod{p}$ である。 $\ell(x) \in \mathbb{Z}_p$ を, $\langle x \rangle = u^{\ell(x)}$ なる \mathbb{Z}_p の元とする。

$(i_1, i_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2$, $f \in \mathcal{O}_p[[T_1, T_2]]$ に対し, P-変換

$$\Gamma_f^{(l_1, l_2)} : \mathbb{Z}_p^2 \rightarrow \mathcal{O}_{C_p}$$

は、

$$\Gamma_f^{(l_1, l_2)}(\rho_1, \rho_2) = \int_{\mathbb{Z}_p^2 \times \mathbb{Z}_p^2} \langle x_1 \rangle^{\rho_1} \langle x_2 \rangle^{\rho_2} w^{l_1}(x_1) w^{l_2}(x_2) d\mu_f$$

によって定義される。さらに、

$$f^{(l_1, l_2)}(T_1, T_2) = \sum_{n, m \geq 0} \left(\int_{\mathbb{Z}_p^2 \times \mathbb{Z}_p^2} \binom{l(x_1)}{n} \binom{l(x_2)}{m} w^{l_1}(x_1) w^{l_2}(x_2) d\mu_f \right) T_1^n T_2^m \in \mathcal{O}_{C_p}[[T_1, T_2]]$$

とおくと、

$$\Gamma_f^{(l_1, l_2)}(\rho_1, \rho_2) = f^{(l_1, l_2)}(U^{\rho_1}-1, U^{\rho_2}-1)$$

が成り立つ。

\cup を導手が P^m の Dirichlet 指標とするとき、任意の $f \in \mathcal{O}_{C_p}[[T_1, T_2]]$ に対し、 $f_{(U, 1)}, f_{(1, U)} \in \mathcal{O}_{C_p}[[T_1, T_2]]$ を、

$$(4.2) \quad f_{(U, 1)} = 1/\zeta(U^{-1}, J_{P^m}) \cdot \sum_{a=1}^{P^m} U^{-1}(a) f(J_{P^m}^a(1+T_1)-1, T_2)$$

$$(4.3) \quad f_{(1, U)} = 1/\zeta(U^{-1}, J_{P^m}) \cdot \sum_{a=1}^{P^m} U^{-1}(a) f(T_1, J_{P^m}^a(1+T_2)-1)$$

によって定義する。ここに、 J_{P^m} は任意の 1 の P^m 乗根、 $\zeta(U^{-1}, J_{P^m}) = \sum_{a=1}^{P^m} U^{-1}(a) J_{P^m}^a$ で、(4.2), (4.3)の右辺は、 J_{P^m} のとり方にはよらない。

U_1, U_2 が導手が P の Dirichlet 指標のとき、 $(f_{(U_1, 1)})_{(1, U_2)} = (f_{(1, U_2)})_{(U_1, 1)}$ である。この巾級数を、 $f_{(U_1, U_2)}$ と書く。

$(j, k) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2$ とすると、

$$\Gamma_{f(w^j, w^k)}^{(l_1, l_2)}(\rho_1, \rho_2) = \Gamma_f^{(l_1+j, l_2+k)}(\rho_1, \rho_2)$$

となる。 Ψ_1, Ψ_2 が第2種Dirichlet指標のとき、

$$\Gamma_{f(\Psi_1, \Psi_2)}^{(l_1, l_2)}(\rho_1, \rho_2) = f^{(l_1, l_2)}(\Psi_1(U)U^{\rho_1}-1, \Psi_2(U)U^{\rho_2}-1)$$

となる。さらに、

$$(f_{(\varphi_1, \varphi_2)})_{(w^1, w^2)} = f_{(\varphi_1 w^1, \varphi_2 w^2)}$$

が成り立つ。

$f \in \mathcal{O}_{C_p}[[T_1, T_2]]$ に対し,

$$U_1 f = f(T_1, T_2) - \frac{1}{p} \sum_{a=1}^p f(J_p^a(1+T_1)-1, T_2)$$

$$U_2 f = f(T_1, T_2) - \frac{1}{p} \sum_{a=1}^p f(T_1, J_p^a(1+T_2)-1)$$

とおく。 $U_1 f, U_2 f \in \mathcal{O}_{C_p}[[T_1, T_2]]$ である。

$$D_j = (1+T_j)^{\frac{1}{p}} / T_j \quad (j=1, 2) \text{ とおく。}$$

任意の measurable function $\phi: \mathbb{Z}_p^2 \rightarrow \mathcal{O}_{C_p}$ に対し,

$$\int_{\mathbb{Z}_p^2 \times \mathbb{Z}_p^2} \phi \, d\mu_f = \int_{\mathbb{Z}_p^2} \phi \, d\mu_{U_1 f}, \quad \int_{\mathbb{Z}_p^2 \times \mathbb{Z}_p^2} \phi \, d\mu_f = \int_{\mathbb{Z}_p^2} \phi \, d\mu_{U_2 f},$$

$$\int_{\mathbb{Z}_p^2 \times \mathbb{Z}_p^2} \phi \, d\mu_f = \int_{\mathbb{Z}_p^2} \phi \, d\mu_{U_1 U_2 f},$$

$$\int_{\mathbb{Z}_p^2} \phi \, d\mu_{D_j f} = \int_{\mathbb{Z}_p^2} \phi(x_1, x_2) D_j \, d\mu_f \quad (j=1, 2)$$

が成り立つ。

直接計算により、作用素 $f \mapsto f_{(U_1, U_2)}$, $f \mapsto U_1 f$, $f \mapsto D_j f$ ($i, j = 1, 2$) は、互いに可換であることがわかる。

補題 4.1. $f \in \mathcal{O}_{C_p}[[T_1, T_2]]$ とし、 $g \in C_p[[T_1, T_2]]$ は $D_i g = f$ を満たすとする。このとき、

$$\int_{\mathbb{Z}_p^2 \times \mathbb{Z}_p^2} x_1^{-1} \, d\mu_f = g(0, 0) - \frac{1}{p} \sum_{a=1}^p g(J_p^a - 1, 0)$$

である。

§ 5. $J_p^{(i_1, i_2)}(J-1, J'-1)$ の計算

$\widehat{\mathbb{Z}_p}$ を \mathbb{Z}_p の整数環の完備化とする。 $\eta(T) = \Omega_g T + \dots$ を, Yager [7] で与えられた、 $\widehat{\mathbb{Z}_p}$ から G_m への $\widehat{\mathbb{Z}_p}$ 上の同型とし、 $\iota(T)$ を、

$\eta(T)$ の inverse とする。

各 $\beta \in U_\infty$ 及び $0 \leq m \in \mathbb{Z}$ に対し, [7] で定義されたように,

$$g_{m,\beta}(T) = \lambda'(T)^{-1} d/dT \log C_{m,\beta}(T) \in \widehat{\mathcal{O}}_m[[T]],$$

$$g_\beta(T_1, T_2) = \lim_{m \rightarrow \infty} \sum_{\sigma \in \text{Gal}(F_m/k)} (g_{m,\beta}^{\sigma}(T_1))_{g_m} (1+T_2)^{k_2(\sigma)} \in \widehat{\mathcal{O}}_\infty[[T_1, T_2]]$$

$$h_\beta(T_1, T_2) = g_\beta(i(T_1), T_2)$$

とおく。さらに, $(l_1, l_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2$ に対し,

$$G_\beta^{(l_1, l_2)}(T_1, T_2) = (U, h_\beta)^{(l_1-1, l_2)}(u^{-1}(1+T_1)-1, (1+T_2)^{-1}-1)$$

とおく。このとき, $\beta \mapsto G_\beta^{(l_1, l_2)}(T_1, T_2)$ は, U_∞ から $\widehat{\mathcal{O}}_\infty[[T_1, T_2]]$ への \wedge -準同型で ([7] 定理22), $G_\beta^{(l_1, l_2)}(T_1, T_2) = G_{\beta^{(l_1, l_2)}}(T_1, T_2)$ となる。ここに, $\beta^{(l_1, l_2)}$ は, canonical な分解 (2.2) で, $A = U_\infty$ の場合における β の $U_\infty^{(l_1, l_2)}$ -成分である。

各 $n \geq 0$ に対し, V_n を 1 の p^n -乗 根全体のなす群とし, $V_\infty = \bigcup_{n \geq 0} V_n$ とおく。

以下, 本節では, $(J, J') \in \overline{V_\infty}^2$ に対し, $G_\beta^{(l_1, l_2)}(J-1, J'-1)$ を, 前節で述べた 2 变数 Γ -変換の性質を用いて 計算する。特に, $\beta = \langle e^{(l_1, l_2)}(u) \rangle^{(l_1, l_2)}$ の場合の結果が §6, §7 で述べる 定理の証明で有用となる。

$\Psi_J, \Psi_{J'}$ を, $\Psi_J(u) = J, \Psi_{J'}(u) = J'$ を満たす 第2種 Dirichlet 指標とし, $\Psi_J w^{l_1}, \Psi_{J'} w^{l_2}$ の導手をそれぞれ $p^{\eta_J(l_1)}, p^{\eta_{J'}(l_2)}$ とする。

以下, $\Psi_J w^{l_1}, \Psi_{J'} w^{l_2}$ のうち少なくとも一方は自明でないと仮定

する。

各 $m \geq 0$, $\beta \in \mathcal{U}_\infty$, $\sigma \in \text{Gal}(F_m/k)$ に対し,

$$h_{m,\beta,\sigma}(T) = (g_{m,\beta}^\sigma(W))_{g_m} \Big|_{W=i(T)}$$

とおく。このとき, $m+1 \geq n_{\beta}(b_2)$ なる m に対して,

$$(U_i h_\beta)_{(\varphi_s w^{b_1}, \varphi_s^{-1} w^{-b_2})} \equiv \sum_{\sigma \in \text{Gal}(F_m/k)} (U_i h_{m,\beta,\sigma}(T_1))_{(\varphi_s w^{b_1}, 1)} ((1+T_2)^{k_2(\sigma)})_{(1, \varphi_s^{-1} w^{-b_2})} \pmod{\omega_{m+1,2} \widehat{\mathcal{O}}_\infty[[T_1, T_2]]}$$

が成立する。また,

$$D_1 (\log (C_{m,\beta}^\sigma(W))_{g_m} \Big|_{W=i(T_1)}) = \Omega_g^{-1} h_{m,\beta,\sigma}(T_1)$$

も成り立つ。以下 $s_{p^{n+1}}$ は

$$i(s_{p^{n+1}} - 1) = u_n = \varepsilon (\zeta^{\infty}/\pi^{n+1})$$

を満たすようにとりたてているものとする。このとき, [7]補題2 を考慮に入ることにより, $m+1 \geq n_{\beta}(b_2)$ なる m に対して, 次の等式が得られる。

$$\begin{aligned} & G_\beta^{(b_1, b_2)}(s-1, s'-1) \\ &= \int_{\mathbb{Z}_p^\times \times \mathbb{Z}_p^\times} x_1^{-1} d\mu(U_i h_\beta)_{(\varphi_s w^{b_1}, \varphi_s^{-1} w^{-b_2})} \\ &= \Omega_g \sum_{\sigma \in \text{Gal}(F_m/k)} \left\{ U_i (\log (C_{m,\beta}^\sigma(W))_{g_m} \Big|_{W=i(T_1)})_{(\varphi_s w^{b_1}, 1)} ((1+T_2)^{k_2(\sigma)})_{(1, \varphi_s^{-1} w^{-b_2})} \right\} \Big|_{(0,0)} \\ &= \begin{cases} \Omega_g / \zeta(\varphi_s^{-1} w^{-b_1}, s_{p^{n+1}(b_1)}) \cdot \sum_{\sigma \in \text{Gal}(F_m/k)} \left(\sum_{a=1}^{p^{n+1}(b_1)} \varphi_s^{-1} w^{-b_1}(a) \varphi_s^{-1} w^{-b_2}(k_2(\sigma)) \right. \\ \quad \times \left. \log_p (C_{m,\beta}^\sigma(T))_{g_m} \Big|_{T=[a] \in (u_{n_{\beta}(b_1)-1})} \right) & (\text{if } \varphi_s w^{b_1} \neq 1) \\ \Omega_g / p \sum_{\sigma \in \text{Gal}(F_m/k)} \varphi_s^{-1} w^{-b_2}(k_2(\sigma)) \sum_{a=1}^{p-1} \log_p \left\{ C_{m,\beta}^\sigma(0) / (C_{m,\beta}^\sigma(T))_{g_m} \Big|_{T=[a] \in (u_0)} \right\} & (\text{if } \varphi_s w^{b_1} = 1) \end{cases} \end{aligned}$$

ここに, \log_p は \mathbb{C}_p^\times 上 定義された p -進対数である.

次に, $\beta = \langle e^{(i_1, i_2)}(\mu) \rangle^{(i_1, i_2)} (\mu \in S)$ の場合を考える.

定理 3.1 により, $n, m \geq 0$, $\sigma \in \text{Gal}(F_m/k)$, $a \geq 1$ に対し,

$$(C_{m, e^{(i_1, i_2)}(\mu)}(T))_{g_m} \Big|_{T=[a] \in (U_n)} = \Lambda_m^{(i_1, i_2)}(\varepsilon_n^{m+1} a z_n; \mu)$$

$$(C_{m, e^{(i_1, i_2)}(\mu)}(0))^{\sigma} = \Lambda_m^{(i_1, i_2)}(0; \mu)^{\sigma}$$

となる.

$n+1 \geq n_s(i_1)$, $m+1 \geq n_{s'}(i_2)$ なる n, m に対し, $\text{Gal}(K_{n,m}/k)$ の指標 $\psi_s^{(1)} x_1^{i_1} \psi_{s'}^{(2)} x_2^{i_2}$ を,

$$\psi_s^{(1)} x_1^{i_1} \psi_{s'}^{(2)} x_2^{i_2}(\sigma) = \psi_s w^{i_1}(k_1(\sigma)) \cdot \psi_{s'} w^{i_2}(k_2(\sigma))$$

によって 定義する.

$\mathfrak{I} \neq (1)$ を K の 整イデアルとするとき, $C \in \mathcal{O}(\mathfrak{I})$ に対し, $\psi_{\mathfrak{I}}(C)$ $\in R_{\mathfrak{I}}$ を, Robert [6] で 定義された ray class invariant とする.

このとき, 直接計算により,

$$\Lambda_m^{(i_1, i_2)}(\varepsilon_n^{m+1} z_n, \sigma)^{\psi_{n,m}^{(i_1, i_2)}} = N_{K_{n,m}/K_{n,m}}(\psi_{\mathbb{E}^{(i_1, i_2)} g^{n+1} g^{*m+1}}(C_0)^{\sigma(\sigma)} / \psi_{\mathbb{E}^{(i_1, i_2)} g^{n+1} g^{*m+1}}(C_0)^{\sigma(\sigma)})^{\psi_{n,m}^{(i_1, i_2)}},$$

$$\Lambda_m^{(i_1, i_2)}(0, \sigma)^{\psi_{n,m}^{(i_1, i_2)} g^{*m+1}} = N_{F_m/K_m}(\psi_{\mathbb{E}^{(i_1, i_2)} g^{*m+1}}(C'_0)^{\sigma(\sigma)} / \psi_{\mathbb{E}^{(i_1, i_2)} g^{*m+1}}(C'_0)^{\sigma(\sigma)})$$

が 任意の $\sigma \in \mathfrak{I}$ に対して 成り立つことがわかる. ここに,

$$\psi_{n,m}^{(i_1, i_2)} = \psi_{\mathbb{E}^{(i_1, i_2)} g^{n+1} g^{*m+1}}, \quad \Omega_{n,m}^{(i_1, i_2)} = ((\varepsilon_n^{m+1} C^{(i_1, i_2)} \pi^{*m+1} + \pi^{n+1}), R_{\mathbb{E}^{(i_1, i_2)} g^{n+1} g^{*m+1}}/K),$$

$$\sigma(\sigma) = (\sigma, R_{\mathbb{E}^{(i_1, i_2)} g^{n+1} g^{*m+1}}/K) \text{ で}, \quad C_0, C'_0 \text{ は } \mathbb{E}^{(i_1, i_2)} g^{n+1} g^{*m+1} \text{ の unit ray class である.}$$

$\mathcal{O}(\mathfrak{I})$ の 任意の 指標 χ に対し,

$$S_{\mathfrak{I}}^{(p)}(\chi) = \sum_{C \in \mathcal{O}(\mathfrak{I})} \chi(C) \log_p(\psi_{\mathfrak{I}}(C))$$

とおく。

類体論により、 $[K_{n,m}^{(i_1, i_2)} : R_{[e^{(i_1, i_2) g^{n+m+1}}]}]$ は、 n, m に無関係となる。この拡大次数を $d^{(i_1, i_2)}$ と書く。

$\eta_j^{(i_1, i_2)} = (\chi_1^{i_1} \chi_2^{i_2})' / ((\varepsilon_{n_j(i_1)-1}^{m+1} C^{(i_1, i_2)} \pi^{*m+1} + \pi^{n_j(i_1)}))$ とおく。これは m には依存しない。

各 $\mu \in \mathcal{S}$ に対し、

$$h_\mu^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) = \sum_{\alpha \in \mathcal{S}} \mu(\alpha) \left(N\alpha - w^{i_1}(\psi_E(\alpha)) w^{i_2}(\bar{\psi}_E(\alpha)) \right. \\ \times \left. (1+T_1)^{\ell(\psi_E(\alpha))} (1+T_2)^{\ell(\bar{\psi}_E(\alpha))} \right)$$

とおく。このとき、Robert [6] §2.3 定理2を用いて直接計算することにより、次の定理が得られる。

定理5.1. $(i_1, i_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2$, $\mu \in \mathcal{S}$, $(s, s') \in T_\infty^2$ とし、 $\psi_s w^{i_1}$, $\psi_{s'} w^{i_2}$ のうち少なくとも一方は自明でないとす。このとき、 $m+1 \geq n_j(i_1)$ なる $m \geq 0$ に対し、

(1) $\psi_s w^{i_1} \neq 1$ なら、

$$G_{\langle e^{(i_1, i_2)} \rangle^{(i_1, i_2)}}^{(i_1, i_2)}(s-1, s'-1) = \frac{\Omega_g d^{(i_1, i_2)} \eta_j^{(i_1, i_2)} \int \ell(C^{(i_1, i_2)}) \int' \ell(\bar{\pi}^{n_j(i_1)})}{k_{C^{(i_1, i_2)}} g^{n_j(i_1)} g^{*m+1} \cdot \zeta(\psi_s^{-1} w^{i_1}, \zeta_p^{n_j(i_1)})} \\ \times h_\mu^{(i_1, i_2)}(s-1, s'-1) S_{\sum_{(i_1, i_2)}^{(p)} g^{n_j(i_1)} g^{*m+1}}^{(p)} ((\psi_s^{(1)} \chi_1^{i_1} \psi_{s'}^{(2)} \chi_2^{i_2})')$$

$$(2) G_{\langle e^{(i_1, i_2)} \rangle^{(i_1, i_2)}}^{(i_1, i_2)}(0, s'-1) = \frac{\Omega_g d^{(i_1, i_2)} w^{i_2}(\bar{\pi}) \int' \ell(\bar{\pi})}{p k_{C^{(i_1, i_2)}} g^{*m+1}} \cdot h_\mu^{(i_1, i_2)}(0, s'-1) \\ \times (p - \int' \ell(\bar{\pi}) w^{i_2}(\bar{\pi})) S_{\sum_{(i_1, i_2)}^{(p)} g^{*m+1}}^{(p)} ((\psi_{s'}^{(2)} \chi_2^{i_2})')$$

となる。

次に, $C^{(l_1, l_2)} = f^{(l_1, l_2)}$ と $C^{(l_1, l_2)} \neq f$ の場合を比較してみよう.

$C^{(l_1, l_2)} = f^{(l_1, l_2)}$ のとき, $C^{(l_1, l_2)}, e^{(l_1, l_2)}(u), d^{(l_1, l_2)}, \eta_s^{(l_1, l_2)}$ をそれぞれ $f^{(l_1, l_2)}$, $\tilde{e}^{(l_1, l_2)}(u)$, $\tilde{d}^{(l_1, l_2)}$, $\tilde{\eta}_s^{(l_1, l_2)}$ と書く。 $C^{(l_1, l_2)} \neq f$ のとき, $C^{(l_1, l_2)}, e^{(l_1, l_2)}(u)$, $\eta_s^{(l_1, l_2)}$ をそれぞれ, $f, \tilde{e}^{(l_1, l_2)}(u), \tilde{\eta}_s^{(l_1, l_2)}$ と書く。後者の場合は, $d^{(l_1, l_2)} = 1$ である。

[6] § 2.3 定理 2 により,

$$\begin{aligned} & \frac{S_{fg^{n_s(l_1)}g^{*\eta_s(l_2)}}^{(P)}((\varphi_s^{(1)}x_1^{l_1}\varphi_s^{(2)}x_2^{l_2})')} {k_{fg^{n_s(l_1)}g^{*\eta_s(l_2)}}} \\ &= \frac{S_{f^{(l_1, l_2)}g^{n_s(l_1)}g^{*\eta_s(l_2)}}^{(P)}((\varphi_s^{(1)}x_1^{l_1}\varphi_s^{(2)}x_2^{l_2})')} {k_{f^{(l_1, l_2)}g^{n_s(l_1)}g^{*\eta_s(l_2)}}} \prod_{\substack{\text{v. 進行群} \\ \text{v. f, v. f}^{(l_1, l_2)}}} \left\{ 1 - (\widetilde{\varphi_s^{(1)}x_1^{l_1}\varphi_s^{(2)}x_2^{l_2}})^{-1}(\tau) \right\} \end{aligned}$$

となる。 $\frac{f}{f}^{(l_1, l_2)} P$ と素な任意の素イデアル \mathfrak{m} に対し, $\alpha_{\mathfrak{m}}$ を \mathfrak{m} の任意の生成元とする。 $v_{\mathfrak{m}}^{(l_1, l_2)} = (\widetilde{x_1^{l_1}x_2^{l_2}})'(\tau)$, $\varepsilon^{(l_1, l_2)} = \tilde{\eta}_s^{(l_1, l_2)} / \tilde{\eta}_s^{(l_1, l_2)}$ とおく。 $\varepsilon^{(l_1, l_2)}$ は s には依存しない。 $G_{\langle \tilde{e}^{(l_1, l_2)}(u) \rangle^{(l_1, l_2)} (T_1, T_2)}$, $G_{\langle \tilde{e}^{(l_1, l_2)}(u) \rangle^{(l_1, l_2)} (T_1, T_2)}$ の $(T_1, T_2) = (j-1, j'-1)$ における値を比較することにより, 次の系が得られる。

系 5.2.

$$\begin{aligned} G_{\langle \tilde{e}^{(l_1, l_2)}(u) \rangle^{(l_1, l_2)} (T_1, T_2)} &= (\tilde{d}^{(l_1, l_2)})^{-1} \cdot \varepsilon^{(l_1, l_2)}(T_1+1)^{\ell(f)-\ell(f^{(l_1, l_2)})} \\ &\times \left\{ \prod_{\substack{\text{v. f} \\ \text{v. f}^{(l_1, l_2)}}} \left(1 - (v_{\mathfrak{m}}^{(l_1, l_2)})^{-1} (1+T_1)^{-\ell(\alpha_{\mathfrak{m}})} (1+T_2)^{-\ell(\alpha_{\mathfrak{m}})} \right) \right\} G_{\langle \tilde{e}^{(l_1, l_2)}(u) \rangle^{(l_1, l_2)} (T_1, T_2)} \end{aligned}$$

である。

§ 6. $\mathcal{Y}_\infty^{(i_1, i_2)}$ の構造

本節では、任意の $(i_1, i_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2$ に対し、 $C^{(i_1, i_2)} = f^{(i_1, i_2)}$ と仮定する。

$n, m \geq 0$ に対し、 $C_{n,m}^{(i_1, i_2)}$ を $U_{n,m}'$ の部分群群とみて、 $C_{n,m}^{(i_1, i_2)} = C_{n,m}^{(i_1, i_2)} \cap U_{n,m}'$ とおく、 $\overline{C_{n,m}^{(i_1, i_2)}}$ を $C_{n,m}^{(i_1, i_2)}$ の閉包とする。 $\overline{C_{n,m}^{(i_1, i_2)}}$ の $\chi_1^{i_1} \chi_2^{i_2}$ -固有空間を $\overline{C_{n,m}^{(i_1, i_2)}}$ と書き、

$$\overline{C_{n,m}} = \bigoplus_{(i_1, i_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2} \overline{C_{n,m}^{(i_1, i_2)}} \quad (\subseteq U_{n,m})$$

とおく。 $\overline{C_{n,m}}$ の $\chi_1^{i_1} \chi_2^{i_2}$ -固有空間は、 $\overline{C_{n,m}^{(i_1, i_2)}}$ に一致する。

$$\mathcal{Y}_\infty^{(i_1, i_2)} = \varprojlim (U_{n,m} / \overline{C_{n,m}^{(i_1, i_2)}})$$

とおく。逆極限はノルムに関するものである。

$D^{(i_1, i_2)}$ を $\{\langle \tilde{e}^{(i_1, i_2)}(\mu) \rangle^{(i_1, i_2)} \mid \mu \in \mathcal{S}\}$ によって生成される U_∞ の \wedge -部分加群とする。このとき、

$$\mathcal{Y}_\infty^{(i_1, i_2)} \cong U_\infty^{(i_1, i_2)} / D^{(i_1, i_2)}$$

となる。

Yager [7] で、 \wedge -準同型

$$W^{(i_1, i_2)}: U_\infty^{(i_1, i_2)} \longrightarrow \wedge$$

が構成され、さらに、 $\phi^{(i_1, i_2)}(\tau_1, \tau_2) \in (\widehat{\mathcal{O}_\infty}[[\tau_1, \tau_2]])^\times$ が存在して、

$$S_\beta^{(i_1, i_2)}(\tau_1, \tau_2) = \phi^{(i_1, i_2)}(\tau_1, \tau_2) W^{(i_1, i_2)}(\beta) \quad (\forall \beta \in U_\infty^{(i_1, i_2)})$$

となることが証明された。 $\mathcal{H}^{(i_1, i_2)} = \bigcap_m W^{(i_1, i_2)}$ とおく。 $H^{(i_1, i_2)}$ を、
 $\{h_\mu^{(i_1, i_2)}(\tau_1, \tau_2) ; \mu \in \mathcal{S}\}$ によって生成される \wedge のイデアルとする。

$(i_1, i_2) \neq (0, 0), (1, 1)$ のとき、 $H^{(i_1, i_2)} = \wedge$. $H^{(0, 0)} = \tau_1 \wedge + \tau_2 \wedge$,

$H^{(i_1, i_2)} = (T_1 + I - u) \wedge + (T_2 + I - u) \wedge$ である。([7]補題28)

定理6.1. 各 $(i_1, i_2) \in (\mathbb{Z}/p-1\mathbb{Z})^2$ に対し, $g^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) \in \Lambda$ が存在して,

$$y_{\infty}^{(i_1, i_2)} \cong \mathcal{H}^{(i_1, i_2)} / g^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) H^{(i_1, i_2)}$$

となる。

(証明) $W^{(i_1, i_2)}(D^{(i_1, i_2)}) = g^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) H^{(i_1, i_2)}$ となる $g^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) \in \Lambda$ を構成すればよい。

(1) $(i_1, i_2) = (0, 0)$ のとき; 定理5.1により, $e^{(0,0)} \in D^{(0,0)}$ が存在して,

$$G_{e^{(0,0)}}^{(0,0)}(T_1, T_2) / T_1 \in \widehat{\mathcal{O}}_{\infty}[[T_1, T_2]]$$

かつ, 任意の $(j, j') \in (V_{\infty} - \{(1)\})^2$ に対し,

$$G_{e^{(0,0)}}^{(0,0)}(j-1, j'-1) / j-1 = \frac{\Omega_g \partial^{(0,0)} \int' \ell(\bar{\pi}^{n_{j'}(0)})}{k_g n_{j}(0) g^{*} n_{j'}(0) \mathcal{L}(\varphi_j^{-1}, \int_p n_{j}(0))} S_{g^{n_j(0)} g^{*} n_{j'}(0)}^{(p)} ((\varphi_j^{(1)} \varphi_{j'}^{(2)})')$$

となる。さらに, 任意の $\mu \in \mathcal{S}$ に対して,

$$G_{\langle \tilde{e}^{(0,0)}(\mu) \rangle^{(0,0)}}^{(0,0)}(T_1, T_2) = h_{\mu}^{(0,0)}(T_1, T_2) \cdot \frac{1}{T_1} G_{e^{(0,0)}}^{(0,0)}(T_1, T_2)$$

が成り立つ。従って, $g^{(0,0)}(T_1, T_2) = W^{(0,0)}(e^{(0,0)}) / T_1$ とおくことにより,

$$W^{(0,0)}(D^{(0,0)}) = g^{(0,0)}(T_1, T_2) H^{(0,0)}$$

が成立する。

(2) $(i_1, i_2) = (1, 1)$ のとき; $\mu_1, \dots, \mu_t \in \mathcal{S}$ 及び $f_1, \dots, f_t \in \Lambda$ が存在して, $T_1 + I - u = \sum_{j=1}^t f_j(T_1, T_2) h_{\mu_j}^{(1,1)}(T_1, T_2)$ となる。

$$\tilde{e}^{(1,1)} = \prod_{j=1}^t f_j \langle \tilde{e}^{(1,1)}(\mu_j) \rangle^{(1,1)}, \quad \hat{e}^{(1,1)} = \prod_{j=1}^t f_j \langle \hat{e}^{(1,1)}(\mu_j) \rangle^{(1,1)}$$

とおく. このとき, [7]定理29の証明から, $G_{\tilde{e}^{(1,1)}}^{(1,1)}(T_1, T_2) \in (T_1 + 1 - u) \widehat{\mathcal{O}}[[T_1, T_2]]$ となり, さらに系5.2から $G_{\hat{e}^{(1,1)}}^{(1,1)}(T_1, T_2) \in (T_1 + 1 - u) \widehat{\mathcal{O}}[[T_1, T_2]]$ となることがわかる. よって, $g^{(1,1)}(T_1, T_2) = W^{(1,1)}(\tilde{e}^{(1,1)}) / (T_1 + 1 - u)$ とおくと, (II) と同様に,

$$W^{(1,1)}(D^{(1,1)}) = g^{(1,1)}(T_1, T_2) H^{(1,1)}$$

が成立する.

(3) $(i_1, i_2) \neq (0, 0), (1, 1)$ のとき; (I), (II) の場合と同様に, $e^{(i_1, i_2)} \in D^{(i_1, i_2)}$ が存在して

$$G_{\langle \tilde{e}^{(i_1, i_2)}(\mu) \rangle^{(i_1, i_2)}}^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) = h_{\mu}^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) G_{e^{(i_1, i_2)}}^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) \quad (\forall \mu \in \mathcal{S})$$

となる. $g^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) = W^{(i_1, i_2)}(e^{(i_1, i_2)})$ とおけばよい.

§7. P-進 L-関数との関係

Yager[7]では, 前節の $\overline{C_{n,m}^{(1,0)}}$ の $x_1^{i_1} x_2^{i_2}$ -固有空間を $\overline{C_{n,m}^{(i_1, i_2)}}$ とおいて, \wedge -加群 $\varprojlim W_{n,m}^{(i_1, i_2)} / \overline{C_{n,m}^{(i_1, i_2)}}$ の characteristic power series と P-進 L-関数との関連性が考察された. $\overline{C_{n,m}^{(i_1, i_2)}}$ を, 前節で述べたように定義すると, $y_{\infty}^{(i_1, i_2)}$ の characteristic power series $g^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2)$ は, 原始的な P-進 L-関数の補間数と, $\widehat{\mathcal{O}}[[T_1, T_2]]$ で同伴になる. このことについて, これから説明する.

各 $k \geq 1$ に対し, $L(\overline{\Psi}_{\mathbb{E}}^k, \chi)$ を, 量指標 $\overline{\Psi}_{\mathbb{E}}^k$ に対する原始的な Hecke L-関数とする. また, $L_f(\overline{\Psi}_{\mathbb{E}}^k, \chi)$ を, $\overline{\Psi}_{\mathbb{E}}^k$ を mod f の量指標とみたときの Hecke L-関数とする. 任意の $0 \leq j < k$ に対し,

$$(7.1) \quad L_\infty(\bar{\psi}_E^{k+j}, k) = (1 - \psi_E(g)^{k+j}/(Ng)^{j+1}) (1 - \bar{\psi}_E(g^*)^{k+j}/(Ng^*)^j) \\ \times (2\pi/\sqrt{d_K})^j \Omega_\infty^{-(k+j)} L(\bar{\psi}_E^{k+j}, k)$$

$$(7.2) \quad L_{f,\infty}(\bar{\psi}_E^{k+j}, k) = (1 - \psi_E(g)^{k+j}/(Ng)^{j+1}) (1 - \bar{\psi}_E(g^*)^{k+j}/(Ng^*)^j) \\ \times (2\pi/\sqrt{d_K})^j \Omega_\infty^{-(k+j)} L_f(\bar{\psi}_E^{k+j}, k)$$

とおく。Damerell の定理により、(7.1), (7.2) の右辺は代数的数になるので、 \mathbb{C}_p の元ともみられる。このとき、各 $(i_1, i_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2$ に対し、 $G_f^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2)$ が $\widehat{\mathcal{O}}_\infty[[T_1, T_2]]$ の中に存在して、 $k_1 > -k_2 \geq 0$, $(k_1, k_2) \equiv (i_1, i_2) \pmod{p-1}$ なる任意の $k_1, k_2 \in \mathbb{Z}$ に対し、

$$(7.3) \quad G_f^{(i_1, i_2)}(u^{k_1-1}, u^{k_2-1}) = (k_1-1)! \Omega_g^{k_2-k_1} L_{f,\infty}(\bar{\psi}_E^{k_1-k_2}, k_1)$$

となる。(〔7〕定理29)

$$(7.4) \quad G^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2) = \prod_{e \mid f, e \neq f^{(i_1, i_2)}} (1 - V_e^{(i_1, i_2)-1} (1+T_1)^{-l(de)} (1+T_2)^{-l(de)})^{-1} G_f^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2)$$

とおく。このとき、次の定理が成立する。

定理 7.1. 各 $(i_1, i_2) \in (\mathbb{Z}/(p-1)\mathbb{Z})^2$ に対し、 $G^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2)$ は、 $g^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2)$ と $\widehat{\mathcal{O}}_\infty[[T_1, T_2]]$ で同伴である。さらに、 $k_1, k_2 \in \mathbb{Z}$ が、 $k_1 > -k_2 \geq 0$, $(k_1, k_2) \equiv (i_1, i_2) \pmod{p-1}$ を満たすとき、

$$(7.5) \quad G^{(i_1, i_2)}(u^{k_1-1}, u^{k_2-1}) = (k_1-1)! \Omega_g^{k_2-k_1} L_\infty(\bar{\psi}_E^{k_1-k_2}, k_1)$$

となる。

(証明) 前半は、 $g^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2)$, $G_f^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2)$, $G^{(i_1, i_2)}(T_1, T_2)$ の構成法と、系5.2 からわかる。後半は、 $\psi_E^{k_1-k_2}$ の導手が $f^{(i_1, i_2)}$ であることと、L-関数の Euler 積分解から得られる。

文献

- [1] J. Coates and A. Wiles, On p -adic L -functions and elliptic units, *J. Austral. Math. Soc. (series A)* 26, (1978), 1-25.
- [2] R. Coleman, Division values in local fields, *Invent. Math.* 53 (1979), 91-116.
- [3] C. Goldstein, Courbes elliptiques et théorie d'Iwasawa, *Publ. Math. D'Orsay*, 82-01.
- [4] K. Kozuka, Elliptic units and two variable p -adic L -functions, to appear in *Mem. Fac. Scie., Kyushu Univ.*
- [5] S. Lang, Cyclotomic fields, Springer-Verlag, New York 1978.
- [6] G. Robert, Unités elliptiques, *Bull. Soc. Math. France Mémoire*, 36 (1973).
- [7] R. Taylor, On two variable p -adic L -functions, *Ann. of Math.*, 115 (1982), 411-449.